

[036_1995]第三十六回中央図書館貴重文物展観目録 ：奈良絵本

九州大学附属図書館中央図書館

今西, 裕一郎
九州大学文学部：助教授

<https://doi.org/10.15017/17896>

出版情報：大学広報. 832, pp.9-15, 1995-04-26. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：



KYUSHU UNIVERSITY

開学記念貴重文物展観 ～「奈良絵本」～

—室町末期から江戸中期にいたる絵本・絵巻—

(中央図書館)

中央図書館では、開学記念貴重文物展観（第36回中央図書館貴重文物展観）を標記のとおり実施します。

なお、展観資料の選定、解説、配列等につきましては、文学部助教授今西祐一郎氏をはじめ関係の方々にご尽力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

展観資料解説

室町時代後期から江戸時代前期にわたって、おびただしく製作された絵入本、絵巻の、素朴、古雅な挿絵は、好事家の間でいつしか「奈良絵」の名で呼びならわされ、珍重されてきた。そうした挿絵をもつ本を「奈良絵本」という。

その名称の由来は、それらの絵入本、絵巻の製作が南都奈良の絵師達によってなされたからだと解されたこともあるが、製作の実際は奈良に限られていたわけではなく、なぜ「奈良」の地名が冠せられたのかは未詳。その由来の解明はなされないまま今日に及んでいる。

奈良絵の特徴は、平安時代末期から鎌倉時代にかけての国宝級の傑作の数々が残る大和絵絵巻（源氏物語絵巻、紫式部日記絵巻など）の、いわゆる引目鉤鼻の端正典雅な大和絵とは対照的に素朴、古雅、そして素材も多くお伽草子の類に片寄る。もっとも、中には源氏物語、伊勢物語のごとき歴とした平安朝物語の奈良絵本もあるが、いずれの場合もその享受者は上層の婦女幼童で、金銀の泥箔を用いた豪華本は祝儀本として重用されたと考えられる。

絵は大和絵絵巻の傑作に較べるまでもなくおおむね二流、作品の内容も一流の文芸とはいえないお伽草子の類が大勢を占めるとあって、従来、美術史においても文学史においても、第一級の研究対象とは目されなかったが、近時、中世文化史の再検討、室町時代物語研究の進展という気運に乗じて、奈良絵本（絵巻）にも大きな注目が集まり、奈良絵本の国際会議や展示が催されたり、その影印叢書が刊行されるなど、奈良絵本は今後一段と研究の充実が期待される分野である。

なお、今回は、奈良絵本以外の近世の絵巻類をも併せて展示した。

(参考文献)

奈良絵本国際研究会議編『在外奈良絵本』（角川書店）

奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』（三省堂）

バーバラ・ルーシュ著『もう一つの中世像』（思文閣出版）

中野幸一編『奈良絵本絵巻集』（早稲田大学出版部）

【奈良絵本】

1. 熊野の本地 (近世前期写) 上下2巻2冊



松濤文庫本。大本 (31.6 × 23.2) 袋綴。水色布目表紙。題簽は上巻剥落、下巻は僅かに残存し「うし 下」と見える。本文と同筆の原題簽。内題なし。見返しは銀箔網目に菊の花の文様が微かに残る。紙数は順に21丁・32丁、内墨付19丁・30丁。共に巻頭巻末に遊紙1丁づづあり。本文料紙鳥の子。1面8~12行。挿絵は上巻に15面、下巻に27面存する。奥書・識語なし。

『熊野の本地』は熊野権現垂迹の由来を記した、いわゆる本地物の中で最も有名なもの一つ。天竺摩訶陀國善財王の妃五衰殿女御が他の999人の妃達の姦計で殺されるが、山中で斬首の直前誕生した王子は山神や鳥獸に守られ成長し、叔父祇園上人に見いだされ父王と再会、やがて父王、母妃、祇園上人らと共に日本紀伊国に鎮まるという内容である。

本書の本文は、系統を異にする数種の諸本の本文の混合を示し、熊野権現の靈験を説く末尾部分を二度にわたって繰り返すなど、本文系統が複雑な『熊野の本地』諸本のなかでも、極めて特異な形態を持っている。

2. しゅてんとうし (近世前期写) 上中下3巻3帖

文学部蔵。半紙本 (23.4 × 17.2) 列帖装。原表紙、濃紺地に金泥で、上巻は雲霞に草花と蝶、下巻は雲霞に夕顔の文様。見返しは銀箔で鶴亀、松竹の丸紋押型模文様。各巻表紙左肩に原題簽 (無辺、丹色) が存し、本文と同筆で「しゅてんとうし 上 (下)」とある。本文1面10行。料紙鳥の子。上巻14丁、中巻26丁、下巻17丁で、各巻とも挿絵5面。下巻末尾左すみに小さく「伊せや次兵衛」と墨書があるのは旧蔵者名か。

源頼光とその四天王の酒呑童子退治を描く酒呑童子の物語は、江戸時代に流布した波川版

御伽草子 23編のひとつで、伝存する奈良絵本、絵巻も多い。その本文には、童子の住みかを大江山とする大江山系と、伊吹山とする伊吹山系の2系統があり、本書は大江山系の本文を持つ奈良絵本である。

3. ふんせう (近世前期写) 上中下3巻3冊

文学部蔵。横本 (16.5 × 24.1) 袋綴。原表紙、蠟引濃紺地に金泥で雲霞に草花の文様。見返しは銀箔、菊花の繋ぎ文様の型押し。表紙中央に原題簽 (丹色、霞引き) 貼付。本文と同筆で「ふんせう上 (下)」と墨書。本文料紙鳥の子。1面13行、行間を等間隔に保つため針でしるした跡がある。上巻21丁、中巻29丁、下巻26丁、各巻とも挿絵5面。

本書は渋川版御伽草子 23編の一つ『文正草子』を奈良絵本化したもの。鹿島大神宮の雑色文太が塩焼きをなりわいとして大長者に立身、鹿島に祈って得た娘二人の姉は中将の北の方、妹は女御、自分も大納言にのぼり長寿を保つという、鹿島信仰を背景としたこの庶民の立身出世譚は、縁起物として正月の読み初めに読まれたものである。「文正」の名は、「文太が塩」→「文塩 (ぶんしほ)」→「文正」と転じたものか、という (佐竹昭広)。

4. 竹とり物語 (近世中期写) 上下2巻2帖

支子文庫本。大本 (24.2 × 18.0) 綴帖。花鳥文様の金欄緞子藍地表紙左肩に下巻のみ「竹とり物語下」(題簽)と外題を記す。本文と同筆の原題簽。上巻は剥落した跡がある。内題「たけとり物語上 (下)」。見返しは金泥布目文様。紙数は順に30丁・26丁で、内墨付28丁・24丁。共に巻末のみ遊紙2丁あり。本文料紙鳥の子。1面10行。

本文は流布本の正保版本系。挿絵は上巻に7面、下巻に6面存し、巻末の余白は本文を散らし書きにする工夫が見られる。奈良絵本の体裁は一般に、横本仕立てのものと、本書のような縦本の大本型があるが、後者の方が比較的古い形である。本書の挿絵の、金銀の箔や砂子をふんだんに用いた豪華さ、襖絵や衣服の文様・顔の表情など細部まで描く巧みさ、鮮やかな色彩は、本書を奈良絵本として優れたものにしている。

5. 伊勢物語 (近世中期写) 上下2巻2帖

支子文庫本。大本 (24.3 × 17.8) 列帖装。表紙は紺地に金沙子をまき、遠山雲霞海辺文様 (上巻) 秋草花文様 (下巻)、見返しには金銀箔を用いるなど、典型的な嫁入り本仕立て。表紙左肩の題簽に「いせ物語 上 (下)」と墨書。上巻墨付49丁、下巻63丁。1面10行書、段末は往々にして散らし書きにする。上・下巻各24面の彩色の挿絵入り。下巻巻末に「伊勢物語新刊 世酷多矣」云々の嵯峨本第三種本 (慶長14年刊) の奥書を有する。

本書は奥書を転写していることからも窺えるように、嵯峨本を基として作成された近世の奈良絵本である。挿し絵の総数（但し落丁のため4段の絵を欠く）挿入箇所も嵯峨本に一致し、構図もほぼ等しいが、人物の配置を逆にしたり、背景の図柄を変えるなど、細かな点に工夫が見られる。中世の奈良絵本に比べ構図が固定化した恨みはあるが、配色もすばらしく、すこぶる美麗な本である。

6. 文正物語（近世中期写）1冊

中央図書館蔵。横本（16.4×23.7）袋綴。原表紙、藍色地に夕顔の文様。見返しは銀泥菱繋ぎ文様。原題簽（11.2×2.3）金泥布目文様、表紙左肩に貼付。「文正物語」と墨書。本文料紙鳥の子。全28丁。3の『ふんせう』同様、渋川版御伽草子23編の一つ『文正草子』を奈良絵本化したもの。

7. たまも（近世初期写）上下2巻2冊

中央図書館蔵。横本（17.8×26.0）袋綴。原表紙、薄茶色無地。題簽は下巻欠。上巻、原題簽（9.3×4.1）丹色、表紙中央に貼付、「たまも 上」と墨書。下巻は表紙に「太摩簿 下終」と墨で打付書き。本文料紙厚手鳥の子。上巻21丁絵7面、下巻19丁絵7面。

近衛帝の御代、鳥羽院の仙洞御所に現われた金毛九尾の老狐の化身、玉藻の前の物語を奈良絵本化したもの。室町前期の成立で、物語の前半は才色兼備の玉藻の前の知恵を披露するために諸説話・故事の羅列がなされ、後半は妖狐と化した玉藻の前の退治譚となっている。

8. 曽我物語（近世中期写）12巻12冊

中央図書館蔵。半紙本（24.3×17.5）列帖装。原表紙、布製紺地七宝金欄。見返し、金箔七宝繋、向い鶴、亀、松竹梅の丸紋を散らす押型文様。各巻表紙左肩に題簽（朱地金泥霞草花）「曾我物語 一（～十二）」と墨書。内題「曾我物語卷第一（～十二）」。本文料紙鳥の子、1面10行、1行14～19字。彩色挿絵全151図（1巻につき8～19図）。巻5最終丁に本文と別筆で「松田善衛門」の識語あり。

曾我十郎五郎兄弟の仇討ち物語として有名な『曾我物語』を奈良絵本の体裁に仕立てたもの。その豪華な装丁から祝儀本であったと考えられる。『曾我物語』は真名本、大石寺本、仮名本の3種に大別され、さらに仮名本は古態を示す甲類と流布本の乙類に分かれる。本書の本文は仮名流布本の本文を持つ近世前期の整板本の写しかと思われるが、挿絵は絵入整板本のものと異なり奈良絵風の古雅な絵である。本書のような形態を持つものは少なく、他には大東急記念文庫蔵本（近世写本25冊）が知られる。新渡戸稻造旧蔵。

9. 中将姫 (近世初期写) 上中2巻2冊

支子文庫本。横本 (15.5 × 23.2) 袋綴。下巻欠。上巻表紙欠、中巻は原表紙、紺地に金泥草花文様。原題簽 (丹色、金泥草花) 表紙中央に貼付、「ちうしやうひめ中」と墨書。内題なし。本文料紙間合紙。1面13行、1行14字前後、挿絵上巻4図、中巻5図。墨付上巻16丁、中巻17丁、行間を等間隔に保つためしるした針の跡がある。上巻1丁表欠か。尾題中巻末に「ちうしやうひめ中」。奥書・識語なし。

中将姫説話は、大和国当麻寺の縁起伝承で、寺宝の曼陀羅迎講に関わる物語。横佩右大臣豊成の娘中将姫は、継母のため雲雀山に捨てられるが、武士に養育される。狩にきた父との再会ののち当麻寺で尼となり、化女と織姫に助けられ蓮糸で曼陀羅を織り、その功德で往生を遂げる。本書は広島大、実践女子大、多久市立図書館等に蔵される近世初期の書写になる奈良絵本に近い体裁を持つが、本文はやや異なる。

10. たなばた (近世初期写) 1冊

支子文庫本。横本 (16.7 × 24.3) 袋綴。表紙は改装、白地雁に松竹。題簽剥落 (表紙中央に跡あり)。本文料紙鳥の子。1面16行、1行14字前後。墨付20丁、但し前半数丁分欠落か。絵は5図残存 (3丁表、5丁表、8丁表、14丁裏、17丁表)、3図分破損の痕跡が残る (10丁裏、13丁表、20丁表)。奥書・識語なし。

通称『あめわかみこ』と呼ばれるお伽草子を奈良絵本化したもの。内大臣の娘乙姫が天稚みこと契りを結び懷妊、父の勘当を受けるが、やがて若君を出産し許される。若君五歳の七夕、天稚みこが再び天降り若君を迎える。帝は退位、乙姫は新帝の后となり一門は繁栄した。『たなばた』の別称を持つお伽草子として、七夕由来譚を語る『天稚彦物語』があるが、本書とは別作品。

本文は明暦元年絵入刊本 (上下2冊) に極めて近い。挿絵も刊本のそれに近い構図を持つ。但し本文は前半部分を欠き、刊本上巻末部分「朶も畫まではにしのたいの人々の～」から始まる。

〔参考〕【丹縁本】

1. たいしょくわん (近世初期刊) 1冊

文学部蔵本。大本 (28.0 × 19.2) 袋綴。古活字丹縁本。原表紙、蠟引焦茶色無地。題簽欠、内題「たいしょくわん」。本文全46丁、絵18面。1面12行。各丁ノド部分に丁付あり。作者・画工・刊年・書肆についての記載なし。

丹緑本とは、近世初期、お伽草子、仮名草子の版本の挿絵に、丹（朱色）、緑、黄で簡単な彩色を施した、いわば奈良絵本の代用品とでもいべき絵入本をいう。

本書は、大織冠（当時の冠位の最高峰、後の正一位に相当する）藤原鎌足公と契りをかわした讃岐国志度の浦の海女が、龍王に奪われた興福寺への寄進の宝珠を一命を捧げて鎌足のために奪い返すという、玉取り伝説に取材した幸若舞曲の本文。

【絵 卷】

12. 竹とり物語（近世中期写）3巻

文学部蔵。巻子本。表紙は華龍文繫ぎの緞子（32.8×19.8）、紐は萌黄色の平織。左上部原装絹題簽に「竹とり物語 上（下）」「竹とりもの語 中」と墨書。見返しは金布目、本文料紙は鳥の子、裏は銀切箔散らし、軸は木製、軸頭は象牙。木箱中央に打付書で「第貳拾五号、竹取物語、三巻」と墨書、近世中末期の筆か。

詞書は通行本。細みの流麗な書体。極彩色の絵は上中下巻各2面づつ、計6面存する。『竹取物語』の絵巻は十数点知られているが、本絵巻は絵の少なさで異色である。又、画面を際立たせるためか、上下の雲型が濃く大きく描かれている。

13. うつほ物語 俊蔭巻（寛文頃写）5巻

細川文庫本。巻子本（32.4×861～1018）。表紙は改装、金欄に草花櫻文様。左肩原題簽に「うつほ物語一（～五）」と墨書。料紙鳥の子。内容は俊蔭巻全巻。極彩色の絵（32.4×48.8）が巻一から順に3・3・5・3・5図の計19図ある。巻序が内容と矛盾しており、正しくは巻3・2・5・4・1の順。題簽の誤貼によるものか。奥書の類はない。

本絵巻は、天人の琴を伝える清原俊蔭、俊蔭女、藤原仲忠、犬宮の四代にわたる音楽の家の物語にあて宮求婚譚、立太子譚がからむ、現存最古の長編小説『宇津保物語』の冒頭巻俊蔭を絵巻化したもの。『宇津保物語』の絵巻としては、他にほぼ同時代の作と思われるものに天理図書館本がある。本絵巻はそれと共に双璧と言われている。

14. 酒天童子絵詞（近世末期写）上中下3巻

支子文庫本。巻子本（25.8×900,933,1517）。上中巻は原表紙、金地に銀の三段雲文様。下巻は本文料紙と同じものに改装。題簽は後のもので「酒天童子絵詞 上（中）（下）」と長方紙片に墨書、旧蔵者田村専一郎氏によるものか。本文料紙楮紙2枚重ね、一部1枚の部分が混じる。1行22字前後。絵は各巻8図。素描風の簡単な彩色を施した絵。奥書・識語の類は

ないが、下巻巻末に源頼光と四天王の酒呑童子退治の経緯を記した古文書の写しを貼付、寛政11年の年記あり。

酒呑童子の物語は、住みかにより大江山系と伊吹山系に分かれる（2参照）。本絵巻は大江山系に属するが、住みかを大江山とする以外は、古法眼狩野元信画の絵巻（サントリー美術館蔵）を祖とする伊吹山系の諸本に極めて近い本文を持つ。また、絵もいくらかの異同が見られるが、古法眼本系統のものとほぼ一致する。

15. 御曹子島渡り（近世中期写）上下2巻

支子文庫本。巻子本（29.5×1394,1474）。表紙は本文料紙と同じ厚手鳥の子。題簽は後のもので長方紙片に「御曹子島渡り 上（下）」と墨書、下部に旧蔵者田村専一郎氏の印が二箇所（専印・遙青）、題字も旧蔵者によるか。1行13字前後。絵は上巻8図、下巻6図。奥書・識語なし。

渋川版御伽草子23編に含まれる『御曹子島渡り』は、源義経が兵法会得のため大日の法の巻物を求めて千島のかねひら大王の城に旅し、大王の娘あさひ天女の決死の助力で巻物を手に入れるという内容。伝本の数は少なく、奈良絵本、絵巻類は大東急記念文庫蔵絵巻を始めとしてこれまで5本が数えられるのみ。本絵巻は本文、上下巻の分かれ方など、赤木文庫旧蔵絵巻（2巻）によく似た形態を持つ。

16. 源氏物語歌絵（近世中期写）1軸

支子文庫本。四季・賀・祝の各部ごとに『源氏物語』からそれにふさわしい場面を絵と和歌で描出したもの。各部の拠った巻と場面は次の通りである。

「春」－花宴（宮中南殿の桜の宴、源氏と臘月夜との邂逅）

「夏」－常夏（源氏、玉鬘に内大臣家の人々を評する）

「秋」－少女（秋好中宮から紫上へ「紅葉の消息」）

「冬」－朝顔（童女達の雪まろばし）

「賀」－若菜下（正月、六条院女楽）

「祝」－藤裏葉（内大臣邸の藤の宴）

ただし、賀部は、歌なし（物語中でもこの場面では歌は詠まれていない）。